

2023年11月9日

立教大学国際学術研究交流制度  
2023年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

|              |      |  |
|--------------|------|--|
| 受入<br>教員     | 所属・職 | 経済学部・准教授   |
|              | 氏名   | 櫻本 健   |
| 受入学部・研究科・研究所 |      | 社会情報教育研究センター   |
| 招へい<br>研究員   | 所属・職 | Chief adviser・<br>Economic Models, Economic Statics, Statistics Denmark<br>所属機関所在国：デンマーク |
|              | 氏名   | Michael OSTERWALD-LENUM  |
| 招へい期間        |      | 2023年10月1日～2023年10月31日（31日間）   |
| 研究経費         |      | 852,640円   |

2. 滞在中の活動

来日および離日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例）〇〇について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

| 年月日    | 活動内容  |
|--------|---|
| 10月1日  | 来日、夜セミナーの段取りについて打合せした。  |
| 10月2日  | 4限、CSI 統計活用セミナー第1回「英語でデータ分析を学ぶ」4339教室、参加登録者31人で約30名参加した。ダイアン・コイル著「GDP」1～2章に基づき、講義後、学生2チームが事前に準備しないように基づき、質疑した。後期課程院生1名からテキストや研究分野のことで、1時間程度多数の質問があった。 |
| 10月9日  | 4限、CSI 統計活用セミナー第2回「英語でデータ分析を学ぶ」4339教室、は25程度参加してダイアン・コイル著「GDP」3～4章に基づく講義とそれに続く学生チームの質疑を行った。一部意欲を持つ学生には大変刺激となり、喜ばれる機会となった。                              |
| 10月16日 | 4限、CSI 統計活用セミナー第3回「英語でデータ分析を学ぶ」4339教室、参加登録者に加え、飛び入りの見学者数名を加えて25名程度であった。ダイアン・コイル著「GDP」5章に基づき、講義後に学生チームが質疑を行い、活発な討論が行えた。                                |
| 10月23日 | 4限、CSI 統計活用セミナー第4回「英語でデータ分析を学ぶ」4339教室、参加  |

|        |  |
|--------|--|
| 10月28日 | <p>登録者に加え、飛び入りの見学者数名を加えて25名程度であった。ダイアン・コイル著「GDP」6章に基づき講義し、教職員と院生が自由に質問した。講義内容が大変充実していて、質問も多数あったため、大変盛況であった。</p> <p>15:00～17:00、立教大学池袋キャンパス本館(1号館)1F 1104教室、CSI統計研究会タイトル「Value-added (at market prices) for a given set of locations, and for a given set of residents. From SNA1968 to SNA1993 to SNA2008」CSIと経済統計研究会、立教大学経済研究所ワークショップ「市場主義」経済学のオルタナティブの共催で研究会を開いた。10名参加者が非常に流暢な英語で質問やコメントいただき、質疑も含めて約2時間活発なやり取りができた。参加者は学内以外に大学研究者、総務省、内閣府の研究者であった。</p> |
|--------|--|

### 3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

当初セミナー4回、研究会1回で想定していたのであるが、追加で時間に余裕がありそうなので総務省と内閣府との討議を設定させていただいた。学内向けセミナーは、部会メンバー2名以外に教職員3名と院生が4名(前期と後期2名ずつ)参加していた。学部生にとって大変刺激になったようで、学部生の多くは英語を学ぶ経験や専門を英語で学ぶという初めての経験に当初は面食らっていたようだったが、最後まで集中力を切らさないで熱心に学んでいた。学部生は1年生1名、2年生10名、3年生12名の計23名であった。学部生は夏休みに準備を始めて、英語についていくのがやっとという学生も見られたが、刺激を受けて大学院進学を決断する者も見られるなど、概ね好影響であった。参加した学生たちは経済学部が多く、経営学研究科、ビジネスデザイン研究科といった院生が積極的な役割を果たした。

院生には大変貴重な機会になったようで、特に第2回目セミナーからチームでデータを集めて質問する機会の際に鋭い指摘を織り込んで聞きごたえのある質疑が授業終了まで続く展開となった。講師の授業内容はケンブリッジ大のテキストに基づきつつも、EU全体のデータ提供サービスの実態やIT先進国デンマークのデータの提供や日本のデータに基づく社会問題に関して鋭い指摘が織り交ぜられていて、英語が分かれば、大変充実したわかりやすい講義だった。そのため、セミナー後はほぼ毎回のようになり英語が分かる参加者から「こういった企画をやっていただけてよかった」という意見をいただいた。世界の第1線の研究者から専門的講義を学生に直接経験させるという招聘の目標は果たされた。

さらにセミナーが終わってから個別に院生から研究のことで質問があり、講師には長い時には1時間以上熱心に、そして丁寧に対応いただいた。学内ではIT先進国であるデンマークに関する関心が高く、経済学部菅沼先生等、櫻本が把握している以外にも研究のことで個別に質問が行き、受け答えをしているケースも見られた。デンマークは行政データに対する研究者のアクセスで世界最高のサービスを提供しているため、経済統計でも計量経済学でも世界的な成果が多数生まれていることで知られる。特に税や社会保障のデータの実証分析では世界でもほとんど同国しかノウハウがない。ミカエル氏は同国で統計データ全体を鳥瞰できる貴重な立場であるため、教員や院生からの高度な質問が数多くみられて、質問いただいた方が満足してお帰りになる機会を目にできた。セミナー全体を通じて異文化コミュニケーション学部の鳥飼慎一郎先生には何度か激励をいただき、励みになった。

研究会も見どころがあった。研究会が10月最後の週と、多数他の研究会が重なる状況であったため、参加者は少なかった。しかし、10名ほど参加いただき、始まる前から終了後もしばらく英語での討論が続いた。現在GDPが国際的に重要指標となっているが、グローバル化を通じて生じている問題と対処に関してわかりやすく整理した報告であった。人数が少ないにもかかわらず、国際経験が豊富な参加者から鋭い質問やコ

メントが研究会で多く見られ、ミカエル氏から丁寧な回答がなされた。内容的には十分国際会議と言えるのではないかという印象を持った。

以下は櫻本の個人研究及び日本政府にとっての研究目的で行うもので、本来学内のものではないが、大変有意義だったため、メモを残すものである。10月10日10時頃から12時半ごろまで経済学部櫻本と一緒に総務省統計委員会担当室を訪れ、萩野覚担当室長と日本のデジタルエコノミー分野の統計整備とEU-SILCとデンマークの実施状況について討議した。コロナの影響で社会統計の整備の重要性が高まる中で、総務省はEU-SILCの実務について情報が不足しているところだったため、来訪を喜ばれた。

10月17日13時半から経済学部櫻本と一緒に内閣府経済社会総合研究所を訪問し、デジタルエコノミーに関する研究や2025年に整備予定の国民経済計算(SNA)に向けた準備状況について松多総括政策研究官、河野研究官と意見交換した。デンマークはIT先進国で、内閣府にとって大変参考になったということだった。櫻本個人としてもIMFのタスクフォースでデンマーク代表など国際機関や主要国と一緒にデータの資本化を計測する取り組みに参加している。個人の研究として貴重なやり取りができて、大変勉強になった。総務省も含めてこれらの議論はミカエル氏にも大変刺激になったようで、第4回目セミナーの中で、Googleのフリーサービスといった、欧州における統計整備で計測が課題となっている実情について大変貴重な情報を提供いただく契機となった。

2016年度にミカエル氏を立教に招いた際にセミナーや講演会を開催した。その際にすぐには明確な効果が出なかったが、参加者から卒業生の中から大学院進学者数名、公務員、データサイエンティスト、調査会社の研究員といった人材が一気に育った。海外長期留学者もセミナー後に出てきた。

今回のセミナーでは参加者と講師が直接数多く議論する機会があった。準備から含めると、事前のプレセミナーを2回開き、講師来日後の本セミナー4回、学生グループの準備もあったことを考えると、ケンブリッジ大学の専門授業を立教で適用するのは周知の準備が欠かせない。幸い今回の貴重な機会をいただくことで、そうした海外大学の専門授業を日本の大学に適用するノウハウが得られた。また参加学生の中で勉強する面白さを感じ、公務員など志望して専門性を磨こうとする者、大学院に飛び級で進学する者、前期課程から後期課程に進学を希望する者が出てきたので、すでに一定の成果と手ごたえを感じている。

実は経済学部は来年度デンマークへの短期留学制度を創設することを決めた。他国の優れた教育との連携は専門授業で一層展開されることが望まれる。今回の機会に引き続き、参加学生たちの意欲を引き出し、さらなる成果につなげる一方で、継続した取り組みの方向性も検討していきたい。最後にこのような貴重な機会をいただくにあたり、招へい研究員制度で審査いただいた先生方、親切に案内いただき、支援いただいたリサーチイニシアティブセンター及び総務課スタッフの皆様、現場でセミナーと研究会を支えてくださった社会情報教育研究センターの先生方・スタッフ達には大変お世話になった。この場を借りて感謝したい。